



コラム

Vol.33

## 日本のIT事情

情報の周辺・周辺の情報 (6)

# 事故車に乗り合わせた 2人の運転士はなぜ 早々と現場を離れたか

矢野直明

サイバーリテラシー研究所 (明治大学客員教授)  
yano@cyber-literacy.com

JR 西日本福知山線の大事故で思うのは、まず事故を起こした運転手の23歳という若さと11カ月という訓練期間の短さである。

多くをコンピュータで自動化された現在の列車を運転する技術(スキル)そのものは11カ月もあればマスターできるだろうし、必ずしも運転手に年齢の下限を設けるべきだと言っているわけでもない。しかしこの若さで経験日数も少ない運転手がたった1人で何十人、何百人の命を預かっている現代の輸送システムそのものについては、やはり強い違和感を覚える。

たとえば映画にもなった「鉄道員」(ぼっぼや)の主人公は、父親と同じ機関士に憧れて鉄道屋になった。そして、当時の機関士が学ぶべきことは多かった。蒸気を沸かす石炭をくべる作業一つにしても、釜にまんべんなくばらまけるようになるまでには長い修行期間が必要だったろうし、もちろん蒸気機関車を運転する作業が1人の機関士でできるわけでもなかった。それらの技術を先輩から体で学び、あるいは同僚と切磋琢磨しながら、徐々に一人前の機関士になっていったのだと思う。

その間には、多くの乗客や仲間たちとの出会いがあり、血の通ったコミュニケーションが積み重ねられたはずである。彼は、そういうオンザジョブ・トレーニングの過程を通して、鉄道屋の仕事の苦労や誇りを徐々に学んでいった。それは意図して作り上げられたシステムというよりも、物理的にやむを得ない事情だったが、そういった現実世界の「制約」が、鉄道屋という一つの職業に、その責任と誇りを生み出していったと言える。

### システムに組み込まれたモラルハザード

コンピュータで自動化されたシステムでは、運転技術そのものは現場に出る前から各種のシミュレータを使って簡単に学ぶことができる。それはたしかに便利だが、それで運転手という仕事の責任や誇りを実感することは難しい。また、安全を確保するために新たな安全装置をとりつけることは、それはそれで必要なことだとしても、

より一層、運転手の緊張を薄れさせることになる。

この事故を通してJR西日本のモラルの失墜がさまざまに指摘されているが、現代社会の便利なシステムには、より大きなモラルハザードを生み出す構造が潜んでいる。モラルハザードというのは、もともと保険業界から出た言葉で、たとえば高額自動車保険に入った人はどうしても運転が安易になるといった事情を指す。それは「だからけしからん」という個々の人間のモラルにではなく、どうしてもそうなりがちだという構造に関係している。

現代の私たちは、多くのモラルハザードに囲まれている。社会全体がそのような不安定なシステムに寄りかかっているということでもあろう。

事故車にたまたま同乗していたJR西日本の運転士2人が救助活動をせず、そのまま出勤してしまったことも、私には気になる出来事だった。彼らの行動は、事故当日の天王寺区のボウリング大会とともにマスメディアで激しく批判されたが、私にはボウリング大会よりも、こちらのほうが異常だと思われる。

運転士2人はその後手記を書き、西日本旅客鉄道労働組合が5月18日に公表した。

どこまでが本人の真意が分からない面もあるが、その1人は「いかに現場を見て気が動転していたとはいえ、現場に残ることができなかった判断の甘さとこれでもいいのかという思いが出勤の途中に何度もあり、時間がたつにつれ、日ごろから安全と人命を守ることを教えられていながらできなかったことは1人の人間としての愚かさ、悔しさ、後悔がますます強まり心苦しい毎日です」「今後も私は一生この重い荷物を背負っていかねばならない」などと書いている。

ふつうなら運転士2人は無我夢中で救助活動を行い、気がついたときには職場への出勤時間をとくに過ぎていた、というふうに事態は進展、後であわてて上司に連絡しても、上司は「無事でよかった。そのまま救助活動を続けてくれ」と言ったのではないだろうか。

現実には、彼ら2人はまさきき、たぶんケータイで職場に連絡、職場では出勤時間に間に合うことだけを



確認した。ケータイですぐ職場に連絡できることが、彼らの行動を狂わせたと言えるだろう。紹介した手記の前半に「結果的に当直の指示により出勤してしまいました」という断り書きがあるのが痛々しい。

ここでは、23歳の運転士の場合とよく似た現代IT社会特有の事情が反映されている。ケータイさえなければ、彼らとて現実の惨状のほうに心を奪われ、自然に救助活動に向かったのではないだろうか。ケータイがあったからこそ、彼らは即刻、現場から“退出”してしまったのである。

私たちはサイバー空間を通じて遠隔地と簡単にコミュニケーションできるようになったために、かえって現実世界でまっとうに生きるチャンスを失っているとすれば、これは由々しき事態である。

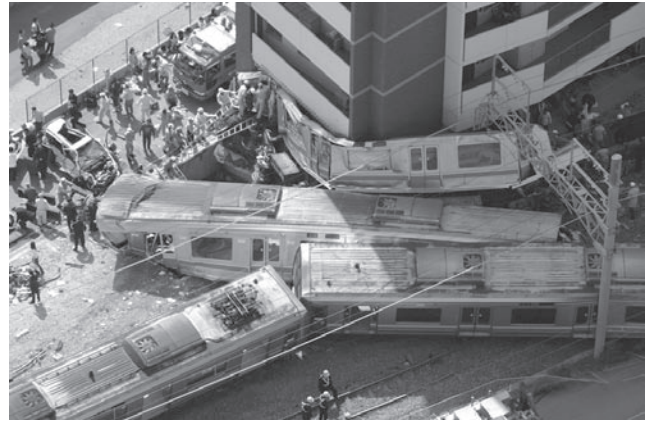
もっとも、ある小さな会合でこのことを話したら、聴衆の1人が、「運転士には自分の仕事、すなわち担当の列車を定時に運行するという役目があったわけで、そちらを優先するのも『職業倫理』ではないか。そういう確固たる意見があっていいと思うが、世間の風当たりの強さにすっかり恐縮した風情で、それを表明しにくくなっている現状の方が問題ではないか」と言った。

ひとりの人間としての生き方、職業人としての立場など、個々の倫理はときに衝突するわけで、その時々でどういう決断をするか、それがその人の生き方でもあろう。私が言いたいのは、ケータイというツールが及ぼす影響、ともすれば倫理的な生き方を希釈してしまう傾向について十分認識すべきだということである。

## サイバーリテラシーと情報倫理

私はかねがね、「サイバーリテラシー」という表現を使って、これからの人生を快適で豊かなものにするためには、「サイバー空間」と「現実世界」が密接に交流するようになった時代の新しい生き方を問い直さなければならぬと主張してきた。それが「情報倫理」の構築である。それは、新しい状況下における伝統的な倫理の空白を埋める作業とも言えよう。その際、技術が作り上げたサイバー空間を対象化すること、ただ便利だからと安易に利用するのではなく、それがもたらす影響についてきちんとした想像力を持つことが大切である。「サイバー空間に風穴をあける」覚悟も必要だと思われる<sup>1)</sup>。

その点で画期的だと思うのは、住基ネットをめぐる5月30日の金沢地裁判決である。同地裁は「住基ネットから離脱したいと望む住民に対して改正住民基本台帳法の条文を適用することはプライバシーの保護を保障した憲法13条に違反する」とし、石川県の住民28人の、住基ネットから個人情報を削除してほしいとの訴え



JR 福知山線脱線事故 脱線しマンションに激突した電車 (毎日新聞社提供)

を認めた(損害賠償請求については棄却)。判決は「住基ネットの便益とプライバシーのどちらを優先させるかは、個人が自らの意思で決定すべきで、行政が住民に押しつけることはできない」と指摘している(翌31日には名古屋地裁で同種訴訟に対して原告の請求を棄却する、金沢地裁とは正反対の判決が出ている。住基ネットをめぐるいくつかの訴訟が今後どのような推移を示すかは興味深い)。

まさに大事なのは、IT社会を生きる一人ひとりの幸福であり、サイバー空間の完全性を求めることではない。国民全員の参加がなければ住基ネットの効果はいくぶん減殺されるとしても、その諦念の上に社会のシステムが築かれぬ限り、現代人の生活はきわめて息苦しいものになるだろう。あるいは先の事例に見られるように、きわめて危ういものになるだろう。

デジタル技術は常にデータの完全な捕捉を追求する。そうでなければシステムの効率が悪いからである。それを利用する人には、個人情報を進んで提供して生活の便利さを買いたい人もいるし、生活の便利さを我慢してでも、そのようなシステムから身を離しておきたいと考える人もいる。だからこれからは、サイバー空間となるべく無縁でいたいという生き方を認めることも必要になる。

もはやサイバー空間とまったく離れて生きることは不可能だが、せめて、いや、だからこそ、主体的に判断できる部分においては、その裁量を認めることが必要になる。いずれそのような「聖域」の存在が渴望されるようになると思っている。

いま一度、社会全体のシステムを、私たちの生き方を考え直すべき時である。

### 参考文献

1) 矢野直明：サイバー生活手帖—ネットの知恵と情報倫理、日本評論社(2005)。

(平成17年6月14日受付)